

## 『1Q84』村上春樹（新潮社）

上手な文章だ。読みやすい。一気に読める気がした。実際には読み始めてから、かれこれ1ヶ月ほどかけて読んだ。上下巻の2冊で1000ページの分量であることも時間がかかった理由ではある。それ以上に、描写が丁寧で読み飛ばすことができない。時間を空けても、続きを読み始めるとそれまでのストーリーの展開が分かる。いつもと同じ生活を送りながら、飽きることも忘れることもなく、楽しみにしながら読み終えた。

『1Q84』という題名が、ジョージ・オーウェルの小説『1984年』をもじったものであることはわかる。あえていうまでもないことなのだろうが、著者の文学に対する造詣は深い。その造詣がこの作品に、無理なく、そして必要不可欠な要素としてちりばめられている。文学だけではない。音楽、服飾、飲み物、自動車、拳銃、そして映画などなどの知識である。

造詣が深いといったが、その基準は自分自身である。文学でも、音楽でも、服飾でも、飲み物でも、自動車でも、映画でも、拳銃でも、その他のどれをとっても、知っている人にとっては当たり前かも知れない。しかし、これだけの分野を網羅し、しかも、それをこの作品の展開の中に、必要な描写の一部として入れ込むことができるのは、造詣が深いと思う。そのことが、丁寧に時間をかけて読ませる文書にしている。読みやすい文書ではあるが、使われている言葉は、必ずしも日常的ではない。小説を読むときに、電子辞書をそばに置いて、言葉を調べながら読んだのは初めてだ。「抽出（ひきだし）」という言葉に最初に躓いた。それから電子辞書を見るようになった。漢字だけではない。<insane と lunatic>が、「どこかで潮が満ち、どこかで潮が引いている。人々は insane と lunatic のあいだを無表情に行き来している。」という文書で使われている。<月>がキーワードになっているこの作品では、比喩として不可欠の言葉でもある。

青豆という姓の女性と、天吾という名の中心人物の話が、入れ替わりに、章ごとに展開される。始めは全く別々に、そしてだんだんとその関係が明らかになり結びついていく。「1Q84」は「1984」年のもうひとつの世界で、月が2つあることが、「1984」年の現実の世界と異なる。それ以外、異なるところは無い。「不思議の国のアリス」の話のように、ファンタジーではなく、現実世界だ。だから、この作品をSFと言えはいえる。また、次々に謎が出てきて、それが読み進むうちに解き明かされることから言えば推理小説とも言える。そして、読み終わると、この作品は日本の伝統的と言ってもいい「私小説」の現代的再生という気もする。

実名では登場していないが、サリン事件、浅間山荘事件を想起させるものが物語の中心にあり、何となく分かる新興宗教、NHKの集金人が主人公の人格を形成した背景として位置づけられ、そしてシベリア、在日韓国・朝鮮人などシリアスな問題、雑誌編集者、予備校教師、スポーツジムのトレーナー、警官、家庭内暴力、浮気等々が登場する。よくこれだけの人物と情景を描写できるものだと感心する。

著者は、この作品についていたるところで「説明」している。「説明」すべき場所で、わざわざゴシック体で至るところに散りばめている。というより、この作品の始まる前から、著者は「説明」している。この本の扉で、「ここは見せ物の世界 何から何まで作りもの でも私を信じてくれたなら すべてが本物になる」という歌詞によって説明している。この歌詞はどこかで聴いたことがあるような気がしたが、知らなかったのがインターネットで調べた。

「It's Only A Paper Moon」 (1932) [作詩=Billy Rose and E. Y. Harburg]の一説である。こんな歌詞らしい。

「そう、それはボール紙に書いた海を渡る、ただの紙の月さ。  
でも、君が僕を信じれば、つくりものではなくなるんだ。  
そう、それはモスリンで作った木の上にぶらさがっている、  
ただのキャンバス地の空さ。  
でも、君が僕を信じれば、つくりものではなくなるんだ。」

君の愛がなかったら、  
それはホンキー・トックのパレードさ。  
君の愛がなかったら、  
それはお祭りの屋台小屋に流れている冴えない歌さ。  
それはバーナムとベイリーの世界。  
みんな、ただのつくりもの。

でも、君が僕を信じれば、つくりものではなくなるんだ。」

そして、第1章の表題でも、「見かけにだまされないように」と最初から「説明」している。さらに、本文中に出てくるゴシック体の初めての文章は、第1章で青豆が高速道路で渋滞に巻き込まれ、高速道路上でタクシーを降り、非常階段から地上に降りようとする場面で、タクシーの運転手が青豆にかける言葉である。「見かけにだまされないよう。現実というのは常にひとつです。」つまり、フィクションの世界から、フィクションの「1984」の世界に入るときである。

この作品は、天吾が、文学賞の新人賞を取り、ベストセラーになるが、芥川賞は取れなかった作品に関わることから始まっている。もちろん、第1章は天吾ではなく青豆だ。つまり、フィクションから始まり、最後に「現実」の天吾によって「回収」される。天吾が作り出した世界は天吾によって「回収」された。同時に、天語の住む「現実」の世界、月が一つの「1984年」の世界は、月が2つある「1984」の世界に変化した。

この作品が、何度も書き改めながら出来たものであること、そして、著者村上の考える良い文体についても触れている。問題の小説「空気さなぎ」についての「説明」を通してである。「『空気さなぎ』は幻想的な物語のかたちをとっているものの、基本的には読みやすい小説だった。それは10歳の少女が語る口語を模した文体で書かれていた。難しい言葉もなく、強引なロジックもなく、くどい説明もなく、凝った表現もなかった。物語は終始、少女によって語られる。彼女の言葉は聞き取りやすく、簡潔でもあり、多くの場合耳に心地よいが、それでいてほとんど何も説明していなかった。彼女は自分の目で見たものを、流れのままに語っているだけだ。立ち止まって、『今一体何が起きているのだろう』『これは何を意味するのだろう』と考察するようなことはない。彼女はゆっくりと、しかし適度な足取りで前に進み続ける。読者はその視線を借りて、処女の歩みについて行く。とても自然に。そしてふと気がつくと、彼らは別の

世界に入っている。ここではない世界だ。リトル・ピープルが空気さなぎをつくっている世界だ。」

帯封に、<書き下ろし 長編小説>とある。確かに、あらかじめ全体の見取り図を持って、各章を丹念に書き上げ、さらにその各章の調和がとれているかを確認しているように思う。第141回芥川賞作品の選評に、村上龍は、「現代を知的に象徴しているかのように見えるが、作者の意図や計算が透けて見えて、わたしはいくつかの死語となった言葉を連想しただけだった。ペダンチック、ハイブローといった、いまとなってはジョークとしか思えない死語である。」と書いている。それを読んだとき、すごいことを言う

と思ったが、この作品を読んで、その発言も当然だろうと思った。